

『愛は罪をおおう』 1ペテロ4:7-11

4:7 万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。

4:8 何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおうものである。

4:9 不平を言わずに、互にもてなし合いなさい。

4:10 あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立てるべきである。

4:11 語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語り、奉仕する者は、神から賜わる力による者にふさわしく奉仕すべきである。それは、すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神があがめられるためである。栄光と力とが世々限りなく、彼にあるように、アメン。

●序論

映画「名もなき生涯」。ナチスの支配が及び、村も国もその暴挙に加担していく中、一人の男とその家族だけは、その信仰によって、その流れに加担することを拒み続けた…という実話を映画化した物語です。

迫害されて孤立し、投獄され、裁きにかけられた男は処刑に至る…という暗い物語。しかし、それは暗いで終わる物語ではない、そこに彼と妻の持つ信念と信仰が「違い」を示し、また静かに輝いているありさまを示すのです。

…聖書はそういう暗闇に思える時代に光を示します。

ヨハネ1:5「光は闇の中に輝いている。そしてやみはこれに勝たなかった」。

主人公と妻との愛、家族の愛が輝いていました。妻が、夫が、家族がお互いの信仰の歩みを、距離を超えて手紙で祈りで支え合っていたのです。

はたしてわたしにそのように生きることができるか…。

そんなわたしに、そしてわたしたちに、教会の大切にすべきありさまを示します。

4:8 何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおうものである。

●本論

I. 心をこめて祈ることです

4:1 このように、キリストは肉において苦しまれたのであるから、あなたがたも同じ覚悟で心の武装をしなさい。

キリストの負った苦しみは、「理不尽なものでした」。

「心の武装」は、まさに、そんな理不尽への備えです。

ペテロは、あえてその苦難についてまっすぐ触れ、またその苦難に対して「キリストの心構え、覚悟と心の武装」をするように命じています。

その状況の困難さに心が折れそうになる、そのところで、苦難を負って苦しんでくださったキリストに目を向けて、心を守る、心の武装を語るのです。

そして今日お読みした個所でこう告げます。

4:7 万物の終りが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。

「万物の終わり」とは、ただ何もなくなってしまう終焉を指すものではありません。

神さまによって、すべてのものが完成される時です。完全な救いと報いの時であることを聖書は証しします。その時が必ず来ます。

その時を信じて、「努めて祈り続ける」ことがわたしたちにチャレンジされているのです。そしてそう祈るために、「心を確かにし、身を慎んで」と言われているのです。

困難や問題が立ちふさがると、視界がふさがれたかのように、人間的な知恵はそこで心を、道を、曲げてしまうことがあります。

神さまを信頼することも、そのために祈ることもやめてしまう…、そういう姿が、かつてのナチスの支配下にあったいくつかの教会の姿であったかもしれないし、また今日のわたしたちにも問われるありさまです。

ペテロの時代は、そのような時代にありました。しかしその信仰をゆがめなかった。

「心を確かにする」、それが教会の祈りの姿です。

そうして祈ることです。わたしたちキリスト者に与えられている大切な使命の第一はこのように「祈ること」だとわかります。

II. 心をこめて愛し合うことです

(新共同訳) 4:8 何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。

教会がキリストの愛に応えることや愛し合うことが、無視されるような風潮が、わたしたちの身近に流れ込んでくる時代がやってきます。

マタイ24章

24:10 そのとき、多くの人がつまずき、また互に裏切り、憎み合うであろう。

24:11 また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。

24:12 また不法がはびこるので、多くの人々の愛が冷えるであろう。

そうしてイエスさまはこう語ります。

24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。

そういう時代を迎えて、なお愛することを大切にして生きること。それは好き嫌いで物事を語ることはありません。コリントの手紙にはこうあります。

1コリント13:4-7

愛は寛容であり、愛は情深い。また、ねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない。不作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みをいだかない。不義を喜ばないで真理を喜ぶ。そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

時代が「互いに裏切り、憎み合う、また惑わしがある、愛が冷える」そんな流れが押

し寄せて来る…

先ほどの実話を映画化した物語を見るとわかります。彼が住んでいた村とその人々は、平時にはとても良い人たち、いや親切さや思いやりのある人たちばかりでした。

けれども、そんな人々の中に暗闇が覆うような歴史が事実やってきた時、その村も人も変わってしまったのです。

しかし、あの主人公の家族だけは、そんな流れの中でその信念と信仰を守り抜くことができた。そこには、夫婦が、その信仰のもとに相互を思いやり励まし合う愛が、距離や隔たりを超えるありさまが描かれているのです。

1コリント13:7 そして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを耐える。

改めてペテロは、教会に向けて「何よりもまず！」と語ります。

4:8 何よりもまず、互の愛を熱く保ちなさい。

そして 「愛は多くの罪をおおうものである。」というのです。

愛がすべての過ちも、呪いをもいやす力を持っています。また、健全な心を、そして信仰を保ちます。これから迎えるどんな状況においても決して忘れないでください。そこに”愛の出番”があります。愛されていることを伝え、愛することを大切にするのです。

Ⅲ. 心をこめて相互に仕え合うことです。

(新改訳) :9 つぶやかないで(不平を言わずに)、互いに親切にもてなし合いなさい。

今日の御言葉でわたしたちが注目すべきなのは、「神さまに愛されていること、罪を覆われていること、そして赦されていること」です。それが、わたしたちが不平を言わずにもてなし合うことと結ばれていくということです。

わたしたちはつぶやきをも圧倒するほど「愛されている」という神さまの愛の大きさへの感動こそが大事なのです。

そして、そこからわたしたちは相互を見て、ゆだねられた賜物を生かして相互にもてなし合い、仕え合って行くことができるのです。

続きにこうあります。

4:10 あなたがたは、それぞれ賜物をいただいているのだから、神のさまざまな恵みの良き管理人として、それをお互のために役立てるべきである。

4:11 語る者は、神の御言を語る者にふさわしく語り、奉仕する者は、神から賜わる力による者にふさわしく奉仕すべきである。

わたしたちが、それぞれ神さまから賜物をいただいている。

口をついてすぐに「私には何も無い」と言われる方もいらっしゃるかもしれませんが、どうかこう祈ってみてください。

まず「信じます。どうかそれを教えてください」と告白する者となりましょう。

自分の賜物を発見し、また育ててゆくことです。それが、「管理する」ということであり、「賜物の良い管理者」の姿です。

それは時間でしょうか？ 才能でしょうか？ 能力でしょうか？ またあなたの元気ででしょうか？ あなたの祈り心でしょうか？ あなたの喜びでしょうか？
そのすべてを用いて仕え合うことで、キリストのからだである教会は、互いの励ましを受けて建て上げられていく。それが聖書が語る証です。

さいごに)

そのすべての愛のご奉仕を通して、これから迎える困難な時代においても、わたしたちは神さまの愛を証しすることができます。

それはいわゆる「隠れた、名もなき人」としての歩みであるかもしれません。

でも神さまは知っていてくださいます。

わたしたちが神さまを知る以上に、神さまがわたしたちを知っていてくださる、顧みていてくださる、愛していてくださるこの経験こそが、わたしたちのつぶやきを癒します。そしてそのすべてが主の栄光となります。

聖書はこうここで結んでいます。

:11 …それは、すべてのことにおいてイエス・キリストによって、神があがめられるためである。栄光とカトが世々限りなく、彼にあるように、アメン。

この教会において、その交わりにおいて、わたしたちがささげる時間が、笑顔が、奉仕が、神があがめられることに結ばれていることを、忘れないことです。全ての栄光はわたし他の主なる神さまに！ そう言える喜びをここで経験しましょう。